

【夢プロジェクト八十八】

という 88 項目からなるやりたい、もしくは願っている事がある。

子供の頃から何となく思っていた事を、確か大学に入った頃から、具体的に書き溜めてきたものだ。

中には【犬を飼う】なんていう、今すぐアィフルに行ってチワワを買ってくれば達成できてしまうものもあれば、【双子の父親になる】とかいう、相手の遺伝子に期待するしかないものもある。

【自分専用のバッティングセンターを持つ(変化球付き)】という割と具体的なものもあれば、【国際貢献する】なんていう、やけに抽象的なものもある。

このリスト、実はまだ未完成だし、ある夢や目標を打ち立てていても、後々「あーしょーもない」と感じて削除したり、差し替えしたりしている。

別にお茶を摘んだり米を作ったりする訳ではないのだけれど、八十八個の夢だ。だからこのライブレポートも 88 本で終わったらいいなと、ギリシャ辺りから思い始め、なんとなく調整してきたのだった。

夢といっても既に達成できているものもある。

【世界を股に掛けた仕事をする】なんてのは、商社である程度かじらせてもらって達成できた事にしている。

しかし何と言っても、この放浪の間ほど、多くの項目を達成できた時はない。しかも、リストにあった上位のものが多い。

【世界を放浪する】

中でもここ 10 数年間ずっとトップにあったのがこれだ。

学生の頃によく旅をしていて、外国ってなんて面白いんだろうと思っていた。だから理系の大学院まで出ておいて総合商社に就職したのかもしれない。

就職してもこの旅心はずっと変わらなかった。

長期で旅するにあたり、先立つものはまず金である。10 年間熱心に働けば、かなりの貯蓄ができると思っていた。だから、

(1)放浪 1 日一万円として 365 日分の資金(と健康な体)

(2)帰国してから死なない程度の生活資金 1 年分もしくは起業資金(とビジネス能力)

というのを目標にし、10 年後にもし子供がまだ産まれていなくて、その時に海外駐在をしていなかったら、会社を辞めて放浪を実現しようと決めていた。

入社式後の研修で、人事部が我々新入社員にアンケートを取った事がある。

『あなたはいつまでこの会社で働きますか?』

無記名だったから、私は『10 年程度』に丸をした。商社に入る人間は、元々山っ気があるか、もともと親が商売をしていて、その武者修業的な意識を持っている人間が多いと聞いていた。

さすがに放浪しようなどと企てている奴はいないが、確かに、よく言えば思い切った事をする面構えの奴が多い。だから皆、短い勤続年数の欄に丸をすと思っていたら、何と『一生勤める』が 7 割もいた。意外でびっくりしたのを覚えている。

ともかく、いろいろあったが10年後には、ある程度計画通りにお金が貯まった上、子供もいないし(ただ結婚さえできていないというのは全く予想外だったが)、日本にいて幸いにも親は元気だ。

商社時代の10年は、職場の環境に恵まれて、とても勉強になったし、何しろめっちゃめっちゃ面白かった。加えて比較的高い給料も貰っていたし、会社を辞める事に不安がなかった訳じゃない。でもこの“10年後”ってのを妥協と惰性で“10数年後”に変更するなんて事は考えないようにしていた。

2つの言葉がある。

『やらずに後悔するよりも、やって後悔する方がイイ』

『結果はどうあれ、やりたい事をやってよかったと思う確率は97%である』

後者の方は一体どうやって集計したのか未だに不思議だが、当時の私にとって、最初の一步を踏み出すのに必要な金言だった。

そして辞める半年ぐらい前から、退職する準備と放浪する準備を徐々に進めていて、周囲にも辞める事を伝え始めていた頃、何とそのタイミングで働いていた会社が合併し、割増退職金を出すという。

これはもう神の啓示に違いない。

ただ割増退職金が出る条件として、『既に会社に退職の意志を伝えていない者』というのがあるって、実はとてもヒヤリとした。その一項を読んだ時、右脇からタラっって汗が流れたのを鮮明に覚えている。同時に、「もしかして、とてもリッチな旅になるかも。ラッキー！」なんて思ったもんだ。

そして今、放浪を終えたくさんの夢を現実化することができ、確かに私は“確率97%”の方だった。

以下は、88のプロジェクトに挙げていて実現した夢である。

【世界を船で旅する】

退職のち放浪レポートの1本目は台湾編だ。しかし最初に訪れた国は実はインドネシアである。

2003年7月16日、夜まできっちり働いて、その日の21時から送別会をしてもらい、深夜2時に家に帰って荷造りし始め、6時台の新幹線に乗り関西の港に行き、そしてインドネシア行きのタンカーに乗ったのだ。

『タンカーなんぞで旅が出来るなどと世間に誤解させてはダメ』という理由で、この旅の詳細は語らない事を、船会社と船主(これは働いていた会社)に約束しているため、この奇妙で有意義な体験を伝えられないのは



インドネシアの石油化学プラント。何百億円という巨大プロジェクトだけに、泣けるほど感慨深かった。

とても残念なのだが、とにかく2週間を越える船の旅は最高だった。

しかもそのタンカーで行ったのは、かつて商社時代に自分が担当させてもらっていた石油化学プラントである。実に総合商社らしい、巨大なプロジェクトだった。俗に言う、地図に載る仕事ってやつだ。

ここにタンク、ここに棧橋、ここに反応器・・・と、頭の中にあった図面通りに完成していて(当たり前だけど)、心の底から感動した。泣けた。

【世界を船で旅する】という夢は、本当はクルーザーもしくは大型豪華客船での旅をイメージしていたが、いわゆる「洋上に浮かぶホテル」なんかよりは、タンカーの方がずっと面白い。

ただこの旅ルートとしては、まずインドネシアでタンカーを降りた後、インドネシア オーストラリア ニュージーランド フィジー イースター島 南米という予定だったのだが、特殊な港にはイミグレがないという理由で、何とインドネシアで入国がかなわなかったのだ(18,000円もしたインドネシマルチビザを持っていたのに！)。

このタンカーはここで石油化学製品を積んで極東に戻る。

製品の売り先は“日本のみ”という可能性があったのだけど、私の航海中に(元)同僚が台湾に出張してくれて、そこで商売を決めてくれた為、タンカーはまず台湾に寄港し、私の旅がいきなり台湾でスタートしたのである。“世界を放浪する”とか言って勇んで出国したものの、実にあぶないところだった。

でもその結果、フィジーのガイドブックやシュノーケルを持ってモンゴルにいたのはさすがに笑える。

【馬で草原を疾走する】

“馬術”という言葉があるくらいだから、馬を自在に操るのは難しいと思っていたが、モンゴル草原を、それこそテレビで見ると格好良く疾走している自分がいた。乗馬は二度目だったにもかかわらず、手綱さばきは完璧だ！。

停まれば言ったら停まるし、走れば言ったら走る。民族衣装を着ていたのもうモンゴルの騎馬軍団の様だった。

でも別の馬に乗ってみると、急に暴れ出して口デオ状態になってしまい、あえなく落馬。その時、鐙(あぶみ 足を乗せる所)に右足首が引っかかったまま引きずられたので捻挫した。手綱をどう引けばよいかとか、鐙には深く足を入れていると知っていたのに、もうどうにもならなかった。

どうやら最初の馬がとても優秀だったらし



駱駝にも乗った。乗るならふたコブがお勧め。のんびり歩くというイメージがあるが、走ると結構早い。

い。だから正確に言うと、【馬に草原を疾走してもらおう】という夢が実現したに過ぎない事になるのだが、まあいいや、駱駝では疾走できたし・・・。

【戦跡を巡る】

人生のテーマが、“愛と平和と Quality of Life,,”である私にとって、その対極にある戦争とその傷痕には興味がある。

だからモンゴルのノモンハンにも、パラオのペリリュウ島にも行き、当時の戦車やゼロ戦を見てきた。アウシュビッツにも行ったし、バルト三国やカシミールにも行った。

この夢の実現でもたらされるのは、“嬉しい・楽しい・癒される”ではなく、“人間のやる事は残酷で空しい”って事だ。やはりそれはその通りだった。

でも同じ事を感じた場所が戦跡の他に、意外な場所でもう1つあった。世界中のネットカフェである。

ネットカフェは、その名の通りインターネットで情報を仕入れたり、メールのやり取りをする場であるが、子供たちのゲームセンターになっている事も多い。そしてどこの国の子供も殺し合いのゲームが大好きだ。これはもう、きっと本能なんだろう。

人間の本能が戦闘好きなんだから、そこに宗教や富の不平等の要素でも入ったら、簡単に殺し合いが始まるのだろう。

なかなか簡単には克服できない問題だと思う。

しかし、宗教の問題や富の不平等が少ない日本が、世界中に殺し合いゲームソフトを輸出しているという事実を思うと、なかなか複雑な気分だった。

因みに、この放浪で有意義だった国ベストスリーは、たまたま戦争にも深く縁がある国だ。順番に、

モンゴル
パラオ
パキスタン

である。

戦跡を見て深く考えさせられ、一方で楽しい事があり、美しい景色があり、美味しい食べ物がある、という事かな。この3つの国にはいつかまた必ず行きたい。



パラオ・ペリリュウ島の戦跡を案内してくれたパラオの人々。みんな気さくでいい奴だ。

【シベリア横断鉄道で旅する】

15年前にヨーロッパを旅したときに、自分と同じ世代の若者の多くが、シベリア横断鉄道でヨーロッパに来ていた。当時は航空運賃がまだ高かった時代なので(ヨーロッパ往復が18万円)、単に「安いから鉄道を使う」という選択だったのかもしれない。

しかし、現地でも知り合った日本の旅行者から、「シベリア横断鉄道で来た」という話を聞いて、

ガツンと頭に一撃くらった様な気がした。しかもその旅行者は小柄でごく普通の女子大学生だった。

まだソビエトの時代である。シベリア横断鉄道の存在は知っていても、それを使ってヨーロッパへ来ようなんて事は思いもしなかったし、当時の自分にはそんな勇氣は持ちあわせていなかった。

だからいつか必ずやってやる、と思っていたのである。

しかしよく考えれば、ビザを取って切符を買って(酒も買って)列車に乗るだけだ。何の難しいことがあるのか。楽しかったけど、やけにあっさりクリアしてしまった。

あれは1度でいい夢だ。



シベリア横断鉄道の客室を掃除する車掌さん。毎日掃除機を掛けてくれる(が、その態度はまだまだ社会主義的だった)。

【アドリア海を自転車で旅する】

逆にあっさりクリアというか、楽勝とっていてきつかったのがこれだ。

アップダウンは激しいし、暑いし、自転車は壊れて抵抗が増すし、荷物は重い。車は多くて危ないし、クロアチア人は、特別親切って訳じゃない。

景色がきれいとか、自転車を漕ぐのが楽しいという事をぶっ飛ばすくらい、達成感ばかり強調されうイベントだった(だからといって、たった600キロの自転車の旅は偉業とは程遠いところが複雑なんだけど)。

これももう2度としたくない。



新品の“ポロチャリ”。まあ、百数十 Kg も乗せて毎日漕げば、壊れても当然かも。

因みに、今回の旅できつかった事ベストスリーは、

クロアチアの自転車の旅

モンゴルの寒くて狭くて痛いバスの旅

ロシアのスリ (精神的に)

である。

【オリンピックを生で見る】

長野オリンピックの時は出張でジャカルタにいたし、この放浪でもヨーロッパへ冬に入ってから到着してしまったので、オリンピックを生で見るのはもう無理かなあと考えていた。

しかしヨーロッパで日本往復のチケットを買い、一旦南米やオーストラリアを旅しておいて、夏にヨーロッパに戻るといふ荒業でアテネを目指す事にした。

チケットが手に入らないとか、宿が全くない、アテネ中は人だらけ、とかいふ噂に翻弄され、諦めかけた事もあったが、大学の後輩が「オリンピック会場で待っている」といふ動機づけもあり、何とか漕ぎ着けて夢を実現する事ができた。

クロアチアでモタモタしていたから時間がなくなり、一週間ぐらいはいるはずのイタリア滞在はわずか10時間という事になってしまったが、その無念さを取り返せるくらいやはりオリンピックは素晴らしかった。

今度は、昼に生でゲームを見て、夜に日本のスポーツニュースで復習するってのが夢だ(リプレイも見たいし、解説も聞きたい)。

“KYOTO”で立候補すれば、勝てる気がするけどなあ。



日本対ギリシャの野球の試合(バックネット裏)で、仕事でオリンピックに来ていた後輩の浅川君(右)と。

【テニス合宿をする】

実はスペインのプロテニスプレーヤー養成学校に3ヶ月ほど入ろうとしていた。サバチーニがベースライン上で繰り出す強力フォアハンド。目指すはそれを生んだスペインテニスだ。もちろん私の腕前は素人の域を遥かに出ない(因みにこんなテーマを書く割に、ほんとに全く下手である 念の為)。

でも「小学生に混じって、テニスコートの回りをランニングして、小学生に時々打ち負ける」ってのも十分だった。

実際にインターネットでバルセロナの学校を探し出し、メールで入学をお願いしたのだが、『うちは高校生までだから』と断られてしまった。

スペインテニスはあきらめ、次にニュージーランドやオーストラリアの学校を調べてみたら、プロの学校というのは小学生クラスでもその実力はもの凄く、いかにも無謀って事が分かってしまい諦めた。しかもちょっとぐらいの体力では、次の日の練習に参加できないほど強烈な練習プログラムらしい。

だから結局、2年に一度やっているジャカルタテニス合宿をすることに。ただ今回は21日間と長く、練習風景をビデオまで撮って研究できたので大満足である。

結果、自分なりに相当上手くなる極意というか可能性を発見できた。それは「痩せる事」である。

他にも【氷河をトレッキングする】とか【砂漠を旅する】なんて夢も実現できた。

地球温暖化で、氷河は減りつつある一方砂漠は増えているという。

その砂漠、日本人のイメージでは、「砂と太陽の灼熱地獄」という感じだが、世界には「ただ木や草が生えていないだけの荒地」の砂漠が多いんだ、という事を知った。現地の定義だと、それも【砂漠】なんだそう
だ。
確かに、北アフリカ、中東、トルコ、イランを旅すると、そんな砂漠ばかりである。砂漠を旅するのが夢だ、なんて言ったら怒られそう
だ。



モンゴルのゴビ砂漠にて。【砂漠を旅する】というよりは、【砂丘でもがく】という方が正しいかも。

一方、狙っていたが実現出来なかった事もある。

【世界で最高の温泉に入る】

今回、いろいろな場所で温泉(や大衆浴場)を楽しんだ。

国を挙げると、台湾、中国、モンゴル、ロシア、エストニア、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、チュニジア、メキシコ、ギリシャ、トルコ、シリア、ヨルダン、パキスタン、インドである。

でも“最高の温泉”を考えたときに、その基準って何だろうと悩んでしまった。

泉質なら台湾の関子嶺温泉だし、楽しかったのはヨルダンの死海温泉だし、温泉に入りながらのビールが美味かったのはルーマニアのオラデア温泉だ。温泉の旅全体なら台湾のホステスと一緒にいった台北の温泉だろう。コストパフォーマンスならインドのマニカルンだ。

結局、その時の雰囲気やタイミングもあるし、一緒にいったメンバーや料金にもよる。何とも結論が出ない。それに、やっぱり世界最大の温泉があるというアイスランドにも行ってみたいと何とも言えないな。

【巨大な魚を釣る】

モンゴルで竿を買い、何ヶ所かでトライしてみたが全く釣れなかった。

ロシアのバイカル湖でも駄目だった。

パラオでも駄目だった。何れも「入れ食い」って聞いていたのに・・・。

【青い空、白い壁、青い海の場所に住む】

チュニジアで一週間ほど実現したが、「住む」ってほどじゃない。

でも夢見た通り、また映画『グラン・ブルー』の通り、素晴らしい青と白の体験だった。

今度は数ヶ月は住んでみたい。やっぱり地中海だ。

【ワインを作る】【ビールを作る】

イタリアとドイツでそれぞれ 2 ヶ月ほどのチャレンジを、とイメージしていたが、結局、滞

在型の旅ではなく、移動型の旅のスタイルを選んでしまい実現しなかった。

まあしかし何だ、作るのも素敵な事だが、やっぱり飲む方が良さそうだ。この2つは、以前よりだいぶプライオリティーが下がったな。

【キューバで野球する】

あの手作り道具と障害物だらけの空き地でやっている草野球に参加するのはさすがに躊躇した。手縫いのボールとグローブに、棒キレのバットなんて、日本だと昭和20年台の風景なんじゃないかな。

その代わりに、パラオでソフトボールの大会に参加できたのは実に楽しかった。ペリリュー島での私のニックネームは“SAMURAI”である。今度はマイグローブを持って行くぞ。

【カヌーで大河を下る】

アラスカで10日ほどカヌーで大河を下る事してみたかった。

ただ熊もいるし、カヌーは一度しかやった事が無い。一人じゃとても無理そうだ。

さらに、夏を自転車とオリンピックに費やしてしまったので今回は断念した。

ただ、あるドイツ人に魅せられてしまった。パラオの島々を何日も掛けてカヌーで移動し、腹が減ったら魚を釣って食い、無人島にテントを張って泊まるなんて最高にイカす事をしていた。カッコイイぜ。

大河もいいが、これもいいなと思っている。



パラオで知り合ったドイツ人。かなりの荷物を積める外洋用のカヌーだそう。

【南極に行く】

大学の先輩が南極越冬隊に参加した事があり、むちゃくちゃ羨ましかった事がある。

パタゴニアに行った際、チリ海軍かアルゼンチン海軍にお願いすれば実現できたが、4000ドルと聞いて躊躇した。いつか後悔しそう。南極にはずいぶんと素敵な温泉があるらしい。

今回達成できなかった夢は、またいつの日か、他の夢と共に実現したいと思っている。

旅の総決算

この放浪に掛かった費用は、ぶちあげた話 320 万円である。

1 日当り 8 千円ちょっと。普通の貧乏旅行者のざっと倍だ。いや節約型の旅行者の中には、1 年で 100 万円も使わない猛者がいるので 3 倍以上かもしれない。現に、メキシコであったカップルは、アジアを旅したときには 1 年で 80 万円だったという、しかも二人で！

<飛行機代>

一番高いのがやはり航空運賃の 86 万円。

合計で 39 台の飛行機に乗った。何時の間にかこんなに乗ったのだらうと思っていたが、運賃を集計して妙に納得した。

飛行機に乗るメリットは、時間を金で買える、バスと違って楽だ、という事が中心だが、大きく動き回って気づいたのは、いきなり文化や人種、食べ物が大きく変わって面白いという点だった(バスで国境を渡ったら、同じ名前の食べ物でも、微妙に違いがあってその変化を楽しめるという利点はある。あるけど少々飽きる)。



エジプトからオマーンに向かう飛行機の窓から。アラビア半島上空の夕焼け。

<宿代>

トータルで 53 万。1 日 1,500 円を切るぐらい。家賃 4 万 5 千円のアパートにいる様なものだ。

寝ている間は節約しよう、と思い泊まる場所はあまり贅沢していなかった。かと言って、あまり不衛生なところにも泊まっていない(南京虫に刺されたのはイランだけだ)。

また、ドミトリー(相部屋)とシングル両方があった場合、シングルを選ぶ事にしていた。どうも厭をかからしい。あまり若者の健康を害しちゃいけないと思ったのと、夜遅く、ワインを飲みながらこのライブレポートを書くのがスタイルになっていた為だ。因みに今も飲んでいる。因みに、シングルがない場合はドミトリーにしていたが、そんな時にはワインをごっそり買って来て、同室の人によくワインをご馳走していた。よく寝て頂くために！

一番安い宿はインド・アムリトサルゴールデンテンプルで無料！ 有料で一番安かったのはエジプトのダハブの宿で 90 円(ドミトリー)。逆に高い宿は、ルーマニアのオラデアで 4,820 円とメキシコのサンミゲルデアジェンデ 4,915 円だった(いずれも超高級温泉ホテル。たまにはいいよね)。

因みに、野宿をしたのは、ボスニアヘルツェゴビナ、ギリシャ、ドバイ。寝袋があってよかった。

<飲食代>

意外と少なかったのが飲食代の 31 万円。1 日 800 円ぐらいなので、日本にいる時よりも断然安い。この内、飲み物代が 4 万円強だったのだが、これはミネラルウォーターを飲んでい

たからだろう。

クロアチアには12日間しかいなかったが、猛暑の中、毎日自転車に乗っていた為に、合計で5千円分も水やコーラを飲んでた。

1日平均800円の食事代だが、時々数千円の夕食を食べていた。ただ最後に長居したパキスタン、インド(1日300~400円)が平均を押し下げたようだ。安いはずの中国では、北京ダックをほとんど毎日食べていたので、平均は1日1,500円と高い。

<アルコール代>

トータルで24万円。1日600円ちょっと。主にビールとワイン。ワインは、多分80~100本近く飲んでいると思う。これだけ飲んだのは生まれて始めてだ。量に換算すると60~75リットルぐらいか。日本人のワインの年間消費量は一人当たり2.5リットルらしいから、ものすごく多い。自分でもよく飲んだと思う。これほどの量を飲む事は、もう一生無いに違いない(金額的には毎日あるかもしれない)。



普段ウイスキーは飲まないが、パタゴニアの氷河の上で飲んだオンザロックは美味かった。

しかし、ちょっと気になって調べたら驚いた。

世界のワイン飲みはフランス人で何と60リットルだそうだ。平均がこの量ってのが凄い。最初は身分不相応に高いワインも飲んでたけど、チリやアルゼンチンでは、1~2ドル程度のワインでもすごく美味しいのがあって、馬鹿馬鹿しいので高いワインを飲まなくなった。たぶん日本に帰っても、1000円以上のワインなんか飲まない気がする。

<乗り物代>

飛行機以外では、鉄道11万円、タクシー8万円、フェリー7万円、バス6万円だ。タクシー代には、車をチャーターしたお金を含めたから高い。しかし、いつもバスに揺られていた気がするが、この結果は意外だった。

またこの4つを足すと、1日当り800円ちょっととなる。

<土産・書籍代>

土産代は17万円。自分のものもあれば、友人に送ったものもあるが、郵送費が半分を占めていたりする。

書籍代は10万円。読み物は好きなので、地球の歩き方やロンプラ、関連本なんかを結構買って読んでいた。観光地には日本語の本を置いてある古本屋も結構あるもんだ。

まあ日本にいても、このぐらいの金額は購入しているだろう。

<温泉・癒し・遊び代>

温泉に掛かったお金は 2 万円。16 ヶ国で 50 回以上入っている。とても満足。

一方癒し関連費用は 5 万円。主にマッサージ代。これも世界各地で 50 回以上は受けていると思う。

遊びに掛かったお金は 13 万円。パラオでのダイビングとクロアチアで乗った自転車の費用が大きい。

<ピザ・税金>

8 万円。避けて通れないけど、実に痛い。一例を挙げるとインドピザ 55 ドル、イランピザ 50 ドル。その国で、何日も暮らせる金額だ。でも日本人だからこの程度で済んでいる、というのも事実だったりする(イギリス人は特に高い)。

<生活必需品・雑貨代>

10 万円。大物だと眼鏡、CD プレーヤー、PC のメディア、リュックサックなど。小物だとトイレトペーパーや洗剤など。

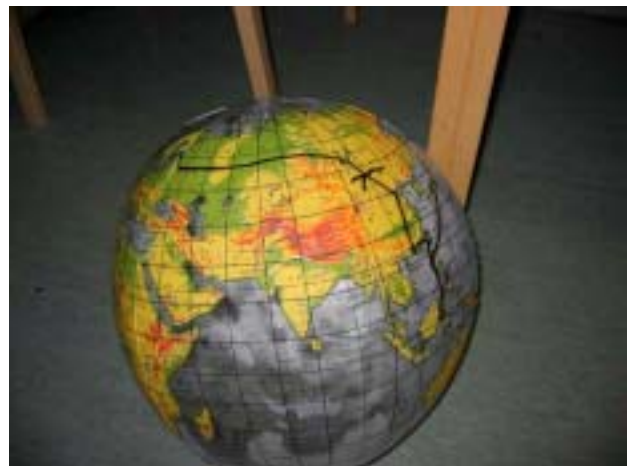
<入場料>

6 万円。遺跡やコンサート代。あまり遺跡好きではないつもりだったけど、やはりそれなりに観光していたって事か。

<通信費・その他>

通信費は 3 万円。旅の最初の方は電話回線

で、AT&T Global Net につないでいた。アクセスポイントが世界各地にあるといってもほとんどが首都で、地方都市には少ない。結局長距離電話を掛けていて、電話代が馬鹿に出来なかった。でも途中でインターネットカフェが至るところにある事が分かったので切り替え、安く済むようになった。割と日本語の環境も整っている(先行者がインストールしてくれている)。その他に、保険料や予防接種、スリにやられた金や使途不明金など 20 万円掛かっている。



世界地図の代りに買った地球儀のビーチボール。通ったルートをマジックで塗っていた。

こうして見てみると、飛行機代以外は、日本での普通の生活に近いような気がしてくる。“飛行機代”を車や旅行などの“趣味の費用”に読み替えると、ますます日常に近い。

一般に旅というと非日常性が強いイベントだ。リゾートだったり、遺跡巡りだったり、ブランドの買い物だったり、普段出来ない事をする。これらは本質的に生活ではない。

朝おきて(いや時々は昼だったが)、さて今日はどこへ行き、何をして、何を食べるか……。

ある場面では旅という非日常を感じながらお金を使い、一方で生活を感じながら節約していた。

だんだんと旅は生活になってくる。長い様で短い人生の中の、何十分の 1 かの生活だ。でもとても濃厚で有意義な生活だったと思う。

15年前と違う事

学生の時に休みを利用して4回、短期ながら似たような旅をした事がある。もう14~16年前だ。その時とは旅の質が随分変わってきた事がある。

<インターネット>

何と言ってもインターネットの出現だ。

日本じゃあまり見かけないネットカフェだが、個人ではまだまだPCが買えない貧しい国ではかなり広がってる。

日本にいる友人のみならず、世界各地で知り合った人とメールをやり取りできるのは凄い事だ。先行している人から、どここの宿がいい、このレストランのこれが美味かった、交換レートは幾ら・・・、なんていう情報が入って来る。一度知り合った人と別の国で待ち合わせ、なんて事も可能だった。

ガイドブックと違い、生で最新の情報だから

とても役に立つ(一方ハプニングも起きにくいから、味気なさも出てくるが)。

中にはホームページを作りながら旅をしている人もいる。私もある人のホームページを見て、次に行く場所の宿の場所と相場を参考にさせてもらっていた。

さらにはインターネットで、株の売買や外国為替証拠金取引を行い、旅の資金を稼いでいる人が何人かいたのには驚いた。



JCBのインフォメーションセンターが、ネットカフェを併設している。オーストラリアのケインズで。

<日本人の旅人>

15年前にはあまり見かけなかった種族が3つほど誕生していた。

(1) ハケンさん

人材派遣に登録し数ヶ月働き金を溜め好きな国に行く。今、こんな女性がとても多い。いや男性も少しいた。「あなたもやったらいいのに。エクセルできる？」なんて聞かれた事もある。ハケンさんをやれば、確実に毎年、数ヶ月の旅が出来るんだそうだ。10年間頑張ってきた身にすれば、何となく違和感があるが、ある意味羨ましい。

派遣ではないが、期間工の人も結構いた。

- ・春夏秋に建設現場で働き、職が少なくなる冬は毎年南半球に行く。
- ・スキーと海水浴シーズンだけリゾートホテルで働き、それ以外は旅をする。

労働市場に幅が出てきたと同時に労働者の価値観も変わったという事なんだろうな、きっと。

(2) 旅する人妻

ちょっと落ち着いた雰囲気的女性だなあとなんて思うと、人妻だった事が多い。

最初はその存在に驚いたが、たくさんの人妻が節約型の一人旅をしている事を知った。宿で会ってちょっと旅情報を交換するぐらいだと、人妻である事はわからないから、実際にはも

っと会っていたに違いない。

大体がシングルルームに泊まっていたが、節約の為にドミトリーという人もいた。そしてそして、ツインをシェアするとさらに安いから、という理由で、別の一人旅の男と泊まる人もいた。

旅行者の間ではこんな会話が・・・

「それって、さすがにモラルに反するんじゃない？」

「だって安いじゃない。別に何があるって訳じゃなし」

「でも旦那が知ったら心配するんじゃないの？」

「いちいち言ったりしないわよ」

これも何となく違和感があるが、海外ゆえに、“安全な日本男性と一緒にの部屋の方が、一人部屋よりもトータルで安全”というのも確かだ。

彼女たちの日程は2~3週間というのが多いが、中には半年、一年なんて人もいる。

旅の資金は、自らバイトで稼いだ人が大多数だったが、旦那からの小遣いもしくは「家計を握っているから余裕よ」という人もいた。

旦那の職業は、IT技術者と公務員が多く、彼女たちが言うには“浮気しない優しいタイプ”の人なんだそう。何となくその男性像が浮かんでくるが、いつかその旦那達からも話を聞いてみたいもんだ。

(3)会社を一旦退職した人

15年前、長期休みの時期に旅している人の大多数は学生だった。学生でないという若者もいたが、いわゆる学生崩れが多かった。一応卒業したが、そのまま旅に出ていて、1~3年旅を続けているという連中だ。

今は、一旦社会に出て2~4年働いた後で旅している人がとても多い。共稼ぎしていたという夫婦も多い。夏休みであっても、多数派はもはや学生ではないのだ。日本人宿に行くと、10年働いた私でさえ、最年長ではない事すらある。

目的があって旅をしている人もいれば、ただ何となく旅に出た人もいる。後者の人の話を聞くと、海外の一人旅ってのが、本当に身近で簡単になったと思う。

15年前にも「自分探しをするために旅している」という人はいたが、「日本でバイトしてても格好がつかないから旅している」というケースは聞いた事が無かった。今は多い。

海外への一人旅は、もう冒険じゃないんだって事を思い知った。

おわりに

世界の絶景が 100 ヶ所載っている写真集がある。秘境やリゾート、遺跡の数々・・・・・・・・・・。
それはそれは見事な写真の数々なのだが、帰国して改めてその写真集を開いてみると、私はたったの 4 ヶ所にしか行っていなかった。

世界にはまだまだ凄いものがある。

しかし素晴らしい建築物や景色を見ても、これはどこかに似ている、ああれだ、という事が多くなってきて感動が薄くなってきていた気がする。

たぶんこれは、旅慣れてしまったせいだろう。旅が長ければ長いほど、事前に危険を察知して旅の醍醐味であるハプニングを自ずと遠ざけてしまうのだ。そして同時に、過去に見た映像と比較して、どちらが良かったなんて事を無意識のうちにやっている。

世界は実に広い。後 2 年ぐらいいは旅を続けたいという気持ちもあるのだが、やはりこの辺で一旦終りにした方がいいだろう。

【夢プロジェクト八十八】に話をもどしたい。

夢の 1 つに【本を出す】というのがあった。文章を書くなんて割と簡単だと思っていた。

しかし、この【退職のち放浪】を書いている間ずっと、作家ってのはすごい職業なんだなぁと心底思い直した。全く、書きゃーいいってもんじゃない。

中学生の野球部員とプロの野球選手の違ってたのは、誰が見てもよく分かる。しかも、投手の投げる球速とか、ベースランニングのタイムとか、定量的にその違いを示す事が出来る。

でもわかった。文章ってのは、なかなか定量的に力の差を示す事が出来ないんだ、だから自分でもできるなんて勘違いしてしまったんだ、と。

このライブレポートは、まず日記を書いて、次に写真を貼りつけ、そして新たにライブレポートとして人様に見せるように編集して作っている。だから日記も、かなり長い間ちゃんと付けていた。そんなことはこれまでの人生にない、私にとっては凄い事だった。

でも旅自体はめちゃめちゃ面白かったのに、出来上がったライブレポートは、読み返せば読み返すほどつまらない内容だった。読み返すのが嫌になって、そのまま出してしまう事もあった(だから誤字脱字が多い ごめんなさい)。

だから、この放浪を題材にして【本を出す】っていう夢は適わないだろうし、今後、人様に読んでもらうものを書くって事はほとんどないと思う。

ただ、【本を出す】という意味が、【本を出版して印税をがっばり稼ぐ】というものではなく、【自分の思いを人様に伝える】という事なので、前向きに考えれば、もしかするとこのライブレポートで達成できているのかもしれない。

これまで長い間【退職のち放浪】にお付き合い頂きまして有り難うございました。

さあ、いよいよ【放浪のち就職】の始まりです・・・・・・・・・・(冗談ですってば)。

おわり